HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	馮勝利氏の韻律文法理論について ： 古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討
Author(s)	松江, 崇
Relation	佐藤進教授還暦記念中国語学論集. 佐藤進教授還暦記念中国語学論集刊行会編. pp.100-124
Issue Date	2007-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34778
Type	journal article
File Information	matsue_HUSCUP2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

馮勝利氏の韻律文法理論について*

―古漢語疑問代詞目的語語順変化についての馮説の検討―

松江　崇

1.はじめに

本稿は、近年、馮勝利[1]氏によって強力に推し進められている韻律文法理論による歴史文法研究について、特に疑問代詞目的語語順変化現象についての馮氏の所説を取り上げ、その特徴と問題点を指摘することを目的とする。

馮勝利氏の基本的な立場を簡明に表現すれば、「文法のすべてが意味と統語関係の対応によってのみ成り立つわけではなく、プロソディーと統語関係の相互作用によって成り立つものも少なくないとの立場に立ち、自らの主張を裏づけるさまざまな事象の発掘と分析に取り組んでいる」(木村 2002:299)ということになろう。この木村英樹氏による紹介は、馮氏の現代文法研究について述べたものであるが、それはそのまま馮氏の歴史文法研究に対しても当て嵌まる。すなわち、馮氏は、文法の史的変化についても、統語論だけでは――氏の統語論は生成文法の枠組みに基づく――そのメカニズムの解明が難しい種々の現象について、韻律文法の観点から新たな解釈を精力的に提出している。

馮氏の歴史文法理論が特に注目されるのは、ここ数年、自身の立場をさらに推し進め、韻律構造の変化が一連の文法変化を引き起こしたとする大胆な仮説を提唱し始めている点にある。例えば、馮（2005:253‐269）では、上古早期（周秦以前）から上古晩期（周秦）に類型学上の重大な変化が生じたとし、①foot（後述）の類型がモーラ foot から音節 foot に変化したこと、②普通ストレス（後述）の類型が、SOV 型から SVO 型に変化したことを挙げ、この間に生じた一連の変化を（実際は中古期に生じた変化も含む)、これら韻律構造

---

* 本稿は、「上古音を視野に入れた出土資料会読」（2005 年 4 月 17 日、於青山学院大学）において「馮勝利氏の韻律句法理論について―疑問代詞目的語前置現象消失過程に関する馮説の検討―」と題した口頭発表に基づく。発表当日は、会の主催者である遠藤光暁先生をはじめ、佐藤進師、水谷誠先生、古屋昭弘先生、大西克也先生の諸先生方から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

[1] 1955 年生、北京人。現在（確認時期 2004 年)、ハーバード大学教授。英語・中国語による数多くの発表論文があるほか、単行本として以下の著書がある（筆者の目睹し得たものに限る)。凡その内容把握の便のために章題を示しておく（なお③は既発表の論文を単に纏めたものであるために章題を省略)。

① 冯胜利 1997《汉语的韵律、词法与句法》 北京大学出版社
　第一章 韵律词与韵律构词法，第二章 四字格与复合韵律词，第三章 韵律对句法的制约，
　第四章 韵律与句法演变，第五章 韵律与修辞，第六章 “管约”理论与汉语被动词

② 冯胜利 2000《汉语韵律句法学》上海教育出版社
　第一章 导论，第二章 词与语，第三章 头重脚轻与尾大不掉，第四章 韵律促发的句法运作，第五章 词序，第六章 韵律结构与被字句的来源，第七章 韵律结构与把字句的产生

③　冯胜利 2005《汉语韵律语法研究》北京大学出版社

の変化によって統一的に解釈しようと試みている。

以上のように、極めて大胆な説を提出しているにもかかわらず、氏の歴史文法理論について本格的に検討された例は、管見の及ぶ限り存在しない。なお、本稿で特に疑問代詞目的語語順変化現象についての氏の理論を取り上げるのは、筆者がこの現象について論じたことがあり、馮氏理論について検討する準備が整っていることによる。但しそれだけではなく、馮氏自身がこの現象についての自説を概説書の中でしばしば引用するなど、韻律文法の観点から合理的な説明を与え得た成功例と自負していると思しきことも、本稿で取り上げる理由の一つである。

２.馮氏理論の基礎概念

馮勝利氏の韻律文法理論に導入される諸概念は多岐に亘る。その多くは英語の韻律文法研究の嚆矢とされる Liberman & Prince(1977)で提出された諸概念が、必要に応じて修正を加えられつつ援用される形をとる。本稿は、疑問代詞目的語語順変化メカニズムに関する氏の理論を検討することが目的であるので、この現象について氏が依拠したものについてだけ、簡単に紹介するに止める[2]。

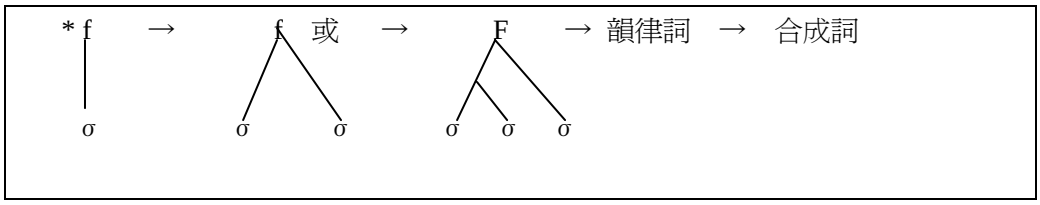
2.1 foot と韻律詞

氏は、ストレスにおける“弱読（軽）”“強読（重）”という最も基本的な概念について、韻律上の“軽重”は相対的な“関係”であるとする相対強弱の原則（Relative Prominance Principle：Liberman & Prince1977）の立場をとる。そして一組の“軽重”の組み合わせを、韻律現象における最小の独立単位である foot と定義する。一つの foot は、二分法原則を遵守せねばならないため、原則的には二項からなるという立場をとり、韻律上の head が、一つだけ存在しなければならないという条件が関わる。

foot には、日本語のようにモーラ（原文“韻素”）を単位とするものと、現代漢語のように音節を単位とするものとが想定される。そして漢語においては、この基本的には二音節からなる一つの foot が、韻律体系における最も基本的な単位である韻律詞（PrWd）となる。なお、このように漢語の foot は二音節を標準とするが、三音節 foot もその存在をみとめる（“超 foot”）。そして漢語の合成語（合成詞）は必ず一つの韻律詞でなければならないと仮定する。以上は、下図のごとく整理される。

[2] 以下、本稿２．は、主に韻律理論の概説書としては最新の馮(2000)に拠りつつ、適宜、馮(2005)、馮(1997)などの説にも触れる。

【図表 2‐1】（現代）漢語の foot・韻律詞：馮(2005:6)



＊σ=音節

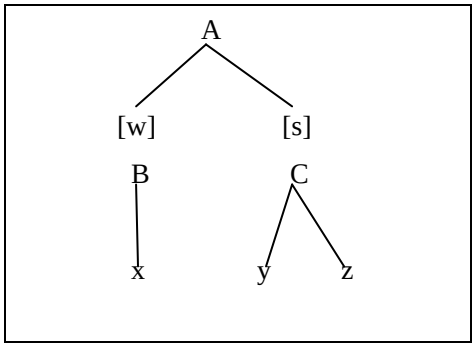
＊f＝foot、F＝超 foot

馮氏は、以上の概念を多くの言語現象の説明に適用する。一例としては、“電影院”“造紙場”のごとき[2+1]形式は一語たり得るが、「小雨傘」「紅燈籠」のごとき[1+2]形式はフレーズであって一語とはみなし得ない（「*紅小雨傘」、cf.「紅小豆」）という現象への援用が挙げられる。その際、前提としてさらに設けられる仮説が、foot が実現される方向が、語構成論レベルと統語論レベルでは異なり、前者は右向 foot（自然 foot）、後者は左向 foot（非自然 foot）であるというものである。そして[2+1]形式は右向 foot、[1+2]形式は左向き foot であるために、前者は語構成論レベルであり、後者はフレーズ構成する統語論レベルであると説明し得るということになる[3]。

2.2 枝分かれストレス規則

上述のごとく foot は二項対立の形をとる。そのとき二項のどちらにストレスがおかれるかは、当該の foot が代表する語彙・統語範疇によって定まるとされる。しかし、その内の一項が枝分かれ構造である場合には、枝分かれしている方にストレスが付与されなければならないという規則を設ける。これが枝分かれストレス規則である（この規則は、Zec&Inkelas1990 の議論を踏まえたものという）。

【図表 2‐2】枝分かれストレス規則



＊ [w]は弱読を，[s]は強読を表す。

[3] この説は、馮(1998)において提出されたものであり、それ以前の氏の説とは大きく異なる。紙幅の関係上、両者の異同について検討することはしない。

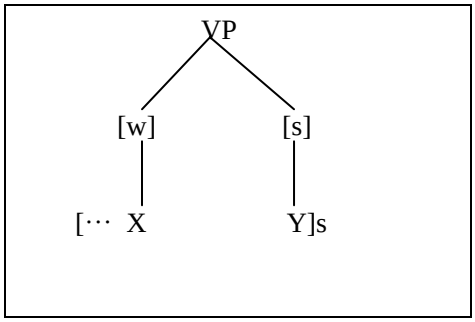
2.3 普通ストレス規則

普通ストレスとは、「文中の個別の成分が強調される」という特殊な状況を排除した後に得られるストレス形式とされる。

馮氏は、*Rochemont(1986)[4]の議論に従い、焦点(focus)の類型を（A）語彙焦点ストレス(Lexical Focal Stress)（B）構造焦点ストレス(Structural Focal Stress)（C）対比焦点ストレス(Contrastive Focal Stress)（D）狭域焦点ストレス／問答焦点(Narrow Scope Focal Stress)（E）広域焦点ストレス／普通ストレス(Wide Scope Focal Stress/ Nuclear Stress) に分類する立場をとり、これらと文におけるストレスの類型について整理を加える（馮 2000:57－64 等)。普通ストレスとは、文全体が焦点となるような場合におけるストレスということになる。

そして馮氏は、Liberman & Prince(1977)の提出した英語の普通ストレス規則を基に[5]、漢語への適用のために、ストレス領域を主要動詞句に限定し、さらに主要動詞の後には一つのストレスしか置かれてはならないという制限を加えた。ストレス付与の具体的操作は、“一、最後尾の主要動詞を探し当て、さらにその動詞の項(Argument)を探し当てる。その後、動詞とそれが支配する成分によって最後尾の韻律領域が構成される。二、左から右方向に、当該の領域の最後の成分の上に普通ストレスを付与する”（馮 2000:64）というものである。

【図表 2‐3】 漢語普通ストレス規則：馮(2000:63)



＊X は文の最後尾の主要動詞

例えば、「張三想買毛衣。」であれば、最後尾の主要動詞は「買」であり、「買」が“X”となり、「買」が支配する「毛衣」が“Y”となる。よって「買毛衣」が最後尾の韻律単位［XY］となる。そしてストレスは最後尾の韻律単位の最後尾の成分、すなわち「毛衣」に置かれなければならないことになる（馮 2000：64)。なお「他走了。」のごとく動詞が自動詞である場合、“Y”が空位になるので、ストレスは動詞“X”（すなわち「走」）に付与される。

---

[4] Rochemont(1986) は、Rochemont,Michael(1986)*Focus in Generative Grammar,* John Benjamins, Amsterdam を指すが、筆者未見。

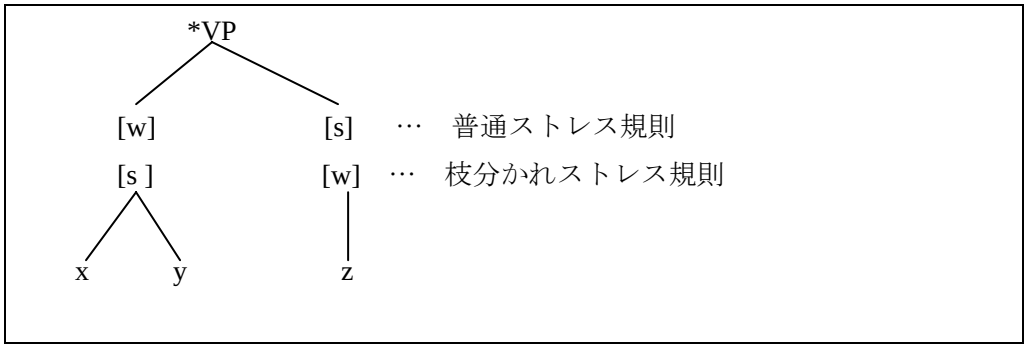
[5] Liberman & Prince(1977)の普通ストレス規則（NSR）では、以下のように主要動詞句に限定されていない。

In a configuration [C A B C]
NSR: If C is a phrasal category, B is strong

2.4　**韻律衝突**

以上の韻律規則どうしが矛盾した場合、統語的には許容されるはずの文も非文になると考える（“韻律衝突”P－Conflict）。

【図表 2‐4】 韻律衝突：馮(2000:65)



氏はこれを、多くの共時現象の説明に用いる。一例を挙げれば、「讀報」「閱讀報刊」「讀報紙」或いは「選課」「選擇課程」「選課程」は成立するが「＊閱讀報」或いは「＊選擇課」は非文となる現象に対して、非文となる文は、上図で言えば「[閱 x 讀 y][報 z]」「[選 x 擇 y][課 z]」のごとく対応し、韻律衝突を起こすために成立しないのだと説明する（馮 2000:114‐120）。

３．疑問代詞目的語語順変化メカニズムについての馮説の概要

本稿で言う“疑問代詞目的語語順変化”とは、上古漢語（殷～前漢）では、疑問代詞が目的語を担った場合、動目関係を結ぶ動詞・介詞に前置されていたものが（(3-1)~(3-3)）、中古漢語（後漢魏晋南北朝）以降、現代語式の後置に転じてゆく現象（(3-6)~(3-8)）を指すこととする。また、これと密接に関係するものに「何N」型名詞フレーズ目的語の語順変化がある。これも目的語となった場合、上古漢語では一般に動詞・介詞に前置され（(3-4)(3-5)）、中古以降は後置へと変化してゆく（(3-9)(3-10)）。以下、論述上の便宜のため、疑問代詞目的語と「何N」型名詞フレーズ目的語とをあわせて“疑問目的語”と呼ぶことがある。

(3-1) 叔孫曰:「…雖怨季孫，魯國何罪。叔出季處，有自來矣。吾又誰怨。然鮒也賄， 弗與不已。」(左傳・昭公元年)

(3-2) 達巷黨人曰:「大哉孔子。博學而無所成名。」子聞之，謂門弟子曰:「吾何執。執御乎，執射乎。吾執御矣。」（論語・子罕）

(3-3) 四月甲辰，鄭公子忽如陳逆婦嬀。辛亥，以嬀氏歸。甲寅，入于鄭。陳鍼子送女。先 配而後祖。鍼子曰:「是不爲夫婦，誣其祖矣。非禮也。何以能育。」(左傳・隱公八年)

(3-4) 公曰:「姜氏欲之，焉辟害。」對曰:「姜氏何厭之有。…」 (左傳・隱公元年)

(3-5) 宋穆公疾，召大司馬孔父而屬殤公焉，曰:「先君舍與夷而立寡人，寡人弗敢忘。若 以大夫之靈，得保首領以沒，先君若問與夷，其將何辭以對。…」(左傳・隱公三年)

(3-6) 桓玄既篡位，將改置直館，問左右：「虎賁中郎省，應在何處。」（世說新語・言語)
(3-7) 夫法度之功者謂何等也。養三軍之士，明賞罰之命，嚴刑峻法，富國強兵，此法度也。(論衡・非韓)
(3-8) 優陀夷言:「出城不遠，逢見死人。亦不知其從何而來。…」(過去現在因果經・大正 3-631b)
(3-9) 又爲大臣賃養馬，馬肥又調，曰:「爾悉有何伎乎。」（六度集經・大正 3-46c）
(3-10) 受命退隱，議曰:「斯梵志道德之靈，吾等當以何方致天女乎。」（六度集經・大正 3-45a）

この疑問代詞目的語語順変化のメカニズムに関する馮勝利氏の研究には、専論として馮(1994)、Feng(1996)があり、それらは馮(1997)および馮(2000)といった氏の韻律文法理論の概説書に修正を加えられながら収められる。実は、この問題に対する馮氏の一連の説には、大きな相違点・修正点がみられ、大まかに言えば馮(1994)、馮(1997)が旧説、Feng(1996)馮(2000)が修正後の新説と分類できる[6]。本稿では原則として馮(2000）にみられる説を対象として検討を行うことし、氏の他の論文との違点については、それが重大な場合のみ注の中で指摘するに止める。

3.1 前置疑問代詞目的語の統語的位置

馮(2000）は、先秦漢語において疑問代詞目的語が前置されるとき、それが動詞に直接附着される「疑問代詞目的語＋動詞」という語順をとるのが原則であると考える。副詞が共起する場合は、「酌則誰先？」「果誰知？」「果安在？」のごとく「副詞＋疑問代詞目的語＋動詞」の語順となり、疑問代詞目的語と動詞とが分離しないため（「*酌誰則先？」「*誰果知？」「*安果在？」)、疑問代詞目的語はV'の内にあると考える[7]。ただし、「且誰不食？」（韓非子・說林上）「將何能保？」（左傳・文五）のごとく動詞と疑問代詞目的語とが否定詞や助動詞で隔てられた例の存在はみとめる。表層におけるこのような両者の文型の生成を実現するため、以下のごとき疑問代詞目的語の統語操作を考える[8]。

---

[6] 必ずしも発表年代と説の新旧とが対応しない原因は不明だが、馮（1997）が概説書であり、論文のFeng(1996)よりも発表が遅れたのかもしれない。

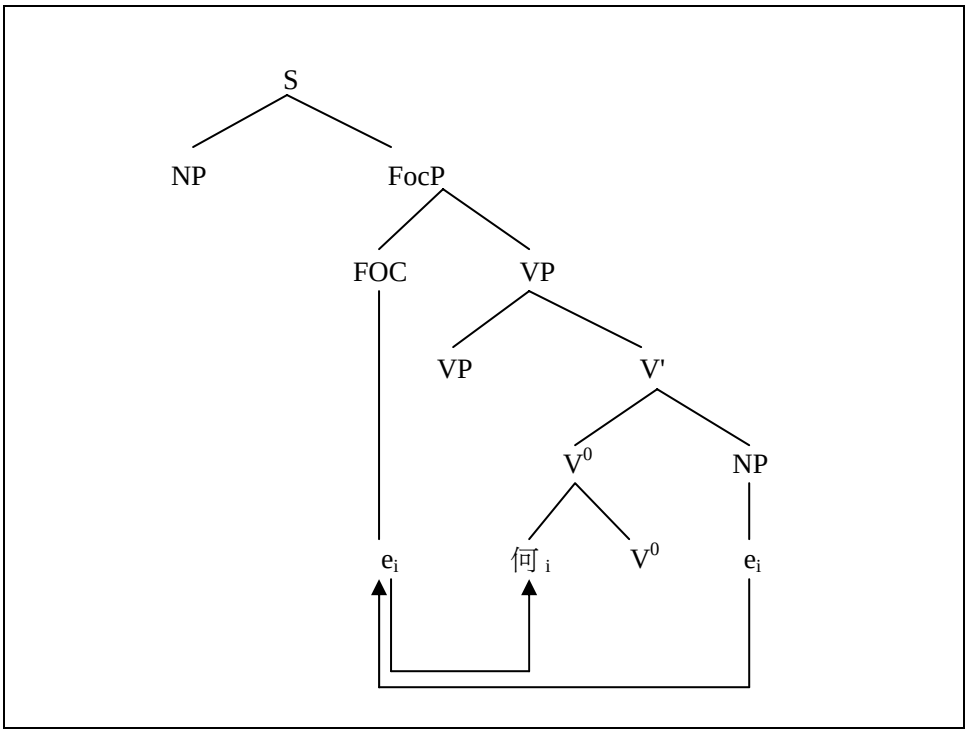
[7] なお、馮氏は、「吾獨何好焉?」のごとき文における「何」は副詞性のものであり、このような「何」はV′の外に現れ得ると考える。

[8] このように新説の馮(2000)では、疑問代詞目的語が前置されるのを、ＳＶＯであるＤ構造からの焦点移動によって説明している。しかし、旧説の馮（1994）では、以下のごとく新説とは全く異なる立場をとり、新説の採用するような焦点移動説を批判している。馮（1994）は、まず疑問代詞目的語の前置現象をどのように解釈するかについて、想定される三種の説に言及する。

第一は、「你什麽都/也不吃。」のように現代漢語でも目的語提前は可能であるので、古漢語の目的語前置現象も奇とするに足りず、漢語は古代より現代まで一貫してＳＯＶとＳＶＯとのいずれの語順もあり得る言語だとする考えである。馮氏はこれに対して、現代漢語（北京語）の表層構造においては確かに少なからず目的語の前置現象がみとめられるけれども、現代漢語の場合「我什麽都吃。」「*我都什麽吃」「他什麽不懂?!」「*他不什麽懂?!」のごとく前置目的語は副詞によって動詞と分けられなければならない。よって古漢語の疑問代詞目的語前置現象とは統語的位置が異なり、同一視すべきではない、と主張する。

第二は、“古語残留説”である。これは我々が、現在目睹し得る目的語の“倒置”現象を、歴史時代以前のＳＯＶ型漢語の遺留と考えるものである。この立場をとる代表的な研究者に俞敏氏がいる。氏は漢蔵語比較研究の観点から、古漢語にみえる“桑柔”“夏區”“室於怒市於色”といった“倒置”的語順に注目し、「原始漢語と蔵語は漢蔵母語の特徴を保存している。つまり目的語が前、動詞が後；中心語が前、修飾語が後である。漢人が中土に進入してのち、何故かは分からないが（被征服民族の影響をうけたか？)、順序

【図表 3‐1】疑問代詞目的語の統語的位置（馮勝利 2000:228）



すなわち、D 構造では動詞の後部に位置していた単音節の疑問目的語が、まず焦点移動に

が転倒してしまったのだ。」と結論する。

第三の説は、“特殊規則”あるいは“移動”説である。これは、古漢語には後に失われた特殊な（共時）規則があり、その規則により SVO 型の基底構造から目的語が動詞の前まで移動するというものである。馮(1994)はこの説には、二点の克服し難い問題があると指摘する。まず、移動される成分の着地点（landing position）の問題をあげる。すなわち、現在の統語研究からすれば、如何なる言語の移動位置も統語上の厳格な要求があり、landing position は必ずＩＮＦＬの外の位置でなければならず、さもなければ non-argument の位置に着地しなくてはならない、しかし古漢語の疑問代詞目的語の位置は non-argument であると未だ証明されてはいない、と指摘する。さらに、いわゆる疑問代名詞移動(Wh-movement)は、統語上、固定的な一つの landing position がなければならぬはずであるが、古漢語の疑問代詞は目的語となった場合以外には、移動操作が機能せず、疑問代詞を受け入れる統一的な統語位置がないという点を問題としている。

以上のことから、馮（1994）は、第二説“古語残留説”を支持する。しかしながら、ＳＶＯとＳＯＶとが同時に共存している状態は、言語の基礎構造としては、理論上、存在不可能であるため、唯一残された解釈は、原始漢語はＳＯＶ型言語であり、ＳＯＶからＳＶＯの転換においては、あるものは早期に変化し、あるものは変化が遅れたと考えるしかない、と主張する。すなわちまず実詞が後置され、その次が代詞、さらに否定句の代詞が後置され、最後に疑問代詞目的語が後置されることにより語順転換が完了したと考えるのである。

馮勝利氏が、以上のような自説を新説では破棄した理由は不明だが、或いは馮（1994）の旧説では「且誰不食？」「將何能保？」などの疑問代詞目的語が否定詞や副詞によって隔てられる例を解釈することが難しいことによるのかもしれない。

なお、もう一点触れておかなければならないのは、筆者が旧説の馮（1994）と新説の馮(2000)とを“異なる立場”と紹介したことについてである。実は馮(2000)においても、上で紹介した旧説と類似の説明を繰り返しているのである（馮 2000：213-221）。ところが最終的には、「残留の SOV 構造（疑問代詞目的語）は新たな体系の中で“再分析”の処理をされなければならず、そうしてはじめて引き続き発生し得たのである」（馮 2000：220）と結論し、共時規則としては焦点移動説を採用している。馮氏自身が明言しているわけではないが、氏の学説に大きな修正があったと判断すべきである。

より V'と主語との間の焦点位置(FOC)に移動し、さらに動詞との間に否定詞や助動詞がなければ、接語化(cliticization)によって、V'内の動詞直前まで移動し、［接語(clitic)+V］形式を構成する、というものである。後者の接語化については、周秦漢語では新興の二音節 foot が確立しつつあったことが前提となっている。すなわち、周秦では、疑問代詞目的語と動詞とがともに単音節であることが絶対多数であり、それら自身では独立の foot を構成することができない。また単音節疑問代詞が韻律上、弱形式(weak form)であることから、接語化が生じるのだと考えるのである（この場合、ストレスは疑問代詞目的語の後ろの動詞に置かれることになる）。

3.2 語順変化のメカニズム

馮氏は、疑問代詞目的語の語順変化についても韻律構造の変化に動機づけられたものと考えている。その核心部分を要約すると以下のようにまとめられよう。

① SVO 型言語である周秦漢語において見られる目的語の“倒置”現象は、SOV 型であった原始漢語の遺留である。周秦漢語の状況から推して、SOV 型から SVO 型への語順変化は、［実詞＞代詞＞否定詞＋代詞＞疑問代詞］の順で進行したと考えられる。
② 代詞が動詞に後置されるのが遅れたのは、それが韻律上の weak form であったためである。この時期にはすでに SVO 型の普通ストレス規則が成立しており、普通ストレスは動詞 V の後にあった。よって strong form たる実詞は、“後重”というＳＶＯ型ストレスの要求を満たすために、いち早く語順の変化を生じた。しかし代詞は weak form であるため、ストレス構造の変化に対する反応が鈍く、語順変化が遅れた [9]。
③ 疑問代詞目的語前置現象は原始漢語の遺留であるが、周秦漢語においては焦点移動という共時規則として再分析されており、D 構造からの疑問目的語の移動によって生じたものとみなされる。単音節疑問代詞は韻律上、weak form であるがゆえに、二音節 foot の要請を受け、接語化(cliticization) によって動詞に附着した。以上が、単音節疑問代詞目的語が前置される“旧規則”である。一方、「何 N」型疑問目的語は、韻律上 strong form であるので、「之」を挟んではじめて前置を保ち得た。
④ 周秦漢語の「何 N」型疑問目的語は、それが韻律詞であるが故に、固定化の過程を経て、漢代以降になって大量の「何 N」型二音節疑問代詞が出現した。これらは韻律上 strong form であるので、普通ストレスが置かれる動詞の後に出現し得る。この「何 N」型疑問目的語がとり得る語順は次の三種がある。

（甲）[[wh　N] Pro V]
（乙）[[wh　N] Pro Neg/Aux V]
（丙）[V　[wh N]]

9 馮氏は否定文の代詞目的語が一般の代詞よりも語順変化が遅れた理由についても言及するが、本稿ではこの問題には触れないため、省略する

⑤　上述（甲）（乙）（丙）はどれも可能である。しかし、ＳＯＶからＳＶＯに転換してゆく大勢によって、またそのことによってもたらされるストレスの後移によって、（丙）型が当時の韻律構造に最もふさわしいものとなり、二音節疑問目的語が後置される趨勢となった。以上が、二音節疑問代詞（或いは二音節疑問固定フレーズ）目的語が後置される“新規則”である。

⑤　上述“新規則”と“旧規則”との競争の勝敗は、以下の二種の要因によって決定付けられた。（一）新興の韻律構造により、二音節疑問フレーズが不断に固定化・語彙化される方向が保証・強化されていること。（二）SVO 型へと向かう語順変化の強大な力により、ストレスが動詞の後にあることが要求されていること。このように、新興の韻律構造の保護のもと、旧規則が淘汰され、新規則に取って代わられた。その結果、語順変化が実現することとなった[10]。

以上の馮（2000）の理論が成立し得るためには、周秦漢語の単音節疑問代詞が韻律上の weak form であるということが不可欠な前提となる。馮勝利(2000)では、単音節疑問代詞が weak form である理由として以下の六点を挙げる。

【１】周秦漢語は SVO 言語である。SVO 型言語においては、普通ストレス規則によりストレスは動詞の後でなければならないため、「疑問目的語＋動詞」という形式においては疑問代詞が動詞より弱く読まれたと推定できる。

【２】周秦漢語の「疑問目的語＋動詞」という形式についてみれば、その絶対多数が単音節疑問代詞が単音節動詞に付加された形式である。すなわち多くは二音節 foot の形式で出現している。このとき、疑問代詞の音節が動詞のそれより長いことはほとんどない。反対に、動詞の音節が疑問代詞のそれより長いことは可能である（「孰法焉」「誰立焉」の如く）。このことからも疑問代詞が上述の形式においては、韻律上、弱読の特徴を有していたことが証明される。

【３】もし疑問成分が二音節であれば「疑問目的語＋之＋動詞」という形式が採用される。つまり「*何罪有」のごとき「何N+V」の形式は存在しない。なぜなら「[何罪]有」のストレス構造は、枝分かれストレス規則によれば「[何罪(s)]有(w)」のはずであるが、これは普通ストレス規則と衝突するために非文となるからである。一方、「[何罪][之有]」のストレス構造は、枝分かれストレス規則によっては強弱が指定されないので、普通ストレス規則に

[10]　馮(2000)では、単音節疑問代詞目的語が中古に至って後置されるようになるメカニズムについて、積極的には言及していない。しかし旧説の馮(1994)においては、この問題について以下のような主張が提出されている。すなわち「ある言語において、その基本語順が転換する時期にあっては、韻律構造上、新たに成立したストレス位置は必ず実現されなければならない。しかし、その構造転換が完全に達成されると、ストレス位置の実現が義務的ではなくなる。漢語においては SOV から SVO に徹底的に転換したのは漢代であり（先秦漢語は SVO 型の韻律構造が成立したばかりの時期）、このときを待ってはじめて単音節疑問代詞が動詞の後に出現できるようになった。」という主張である。馮氏が後に以上の主張を修正したのか否かは、筆者には不明である。少なくとも馮(2000)では、専ら漢代以降における疑問代詞の二音節化の現象が強調されている。

よるストレスを実現し得る。「何 V」及び「何 N　Pro+V」[11]形式が普遍的にみられること、また「何 N　V」形式が存在しないことによって、この時期の疑問代詞を用いた疑問文おけるストレスは疑問代詞にはなく、動詞性成分の方にあると考えることができる。

【４】疑問代詞目的語後置の過程における「何 N」形式の出現状況も上記の主張の根拠となる。魏培泉の研究によれば、疑問代詞が後置された早期の文献においては「何 N」の形式は一般にすべて動詞に後置される。ここから単音節「何」と二音節（或いは多音節）「何 N」の文法位置について、以下の二種の相補分布を帰納することができる。

４-1　疑問代詞目的語後置以前の「何 V」と「何 N 之 V」の間の相補分布。つまり単音節「何」は必ず動詞に直接附着されなければならず、「之」によって隔てられることができないが（「*何之有」）、二音節（多音節）の「何 N」は動詞に直接附着することができず（*「*何罪有」）、必ず「之」によって隔てられなければならない。これは疑問目的語が動詞に直接附着し得るか否かについての相補分布である。

４-2　疑問代詞目的語の後置が実現した初期における「何 N」と「V 何 N」の間の相補分布。つまり単音節「何」は動詞の前に現れる時、二音節（多音節）の「何 N」は動詞の後に出現しなければならない。これは疑問代詞目的語の動詞の前後に関する相補分布である。

上述の二種の相補分布はいずれも次のことを強く証明する。すなわち、動詞前の疑問代詞目的語の位置は“弱読”の位置だったのであり、そのために二音節形式の疑問代詞目的語はこの位置に出現することができなかったのである。

【５】上述の例が動詞の前の「疑問目的語」の位置が弱読されねばならなかったことを証明するものならば、以下の例は疑問代詞それ自身がこの時期に弱読形式（weak form）であったことを証明するものである。「何不」→「盍」、「奈何」→「那」のごとき合音は、「何不」や「奈何」が何らかの音声的な弱化の過程を経たために成立したものと考えられる。「何」が“二合一”の弱化形式の中に現れるという事実は、それが音声上、弱読の性質を有していたことを証明するものである。

【６】先秦漢語の疑問代詞は一般に単音節形式であり、「何物」「何等」などのごとき二音節疑問代詞は漢代以後になって発展したものである。言い換えれば、これら韻律上の“強式（二音節）”疑問代詞は「wh　V」が「V　wh」に変化した後になって出現したものである。よって「wh　V」が「V　wh」に変化する以前には、漢語に強式疑問代詞はなかったのである。この事実も、先秦の単音節疑問代詞が弱読であったことに有力な根拠を与えるものである。

以上のごとき馮勝利氏の理論は、何故に中古以降になって疑問代詞目的語が後置されるようになったかについて具体的な説明を試みている点において、疑問代詞目的語語順変化メカニズムについてのはじめての本格的な理論とみなし得る。しかしながら筆者は、この

[11] 原文は“「何＋N　Pro+V」”であるが、他の箇所との表記の整合性を考えて、筆者が修正した。馮（2000）の表記法は、この箇所以外も多く一貫していないため、必要応じて筆者が断りなく訂正した。ただし、内容の区別に関わる疑いがあるものは、原文の表記を尊重した。

馮勝利氏の理論は多くの問題を孕んでいると考えている。

以下、理論自体に対する疑義（本稿４.）と語順変化の状況に対する解釈力（本稿５.）の点から検討する。

４．馮氏理論およびその前提となる言語事実に関する問題点

本稿５．においてみるように、筆者は、馮氏理論の最大の欠点は、上中古間における疑問代詞目的語の語順変化の状況を、十全に説明し得ない点にあると考えている。いわば理論の応用面で問題があると考えるのだが、そもそも理論自体或いは理論成立の前提となっている言語事実に関しても問題が少なくない。以下、この点を検討する。

4.1 周秦の疑問代詞は weak form か？

4.1.1 馮氏の根拠の検討

まず、上述の馮（2000）理論の核心である「周秦の疑問代詞は weak form である」という主張について検討したい。そもそも現代漢語において疑問代詞は、疑問用法であればその文法的位置に関わらず原則として重読される（陳文芷 1981）。これは疑問代詞が焦点を担うことからしても極めて自然な現象である。にもかかわず、現代漢語とは逆に、疑問代詞は重読され得ない weak form であると主張するのであれば、積極的な根拠が必要であろう[12]。ところが馮氏の挙げる根拠の六点（本稿 3.2）のうち、【五】以外は、すべて SVO 型の普通ストレス規則、枝分かれストレス規則といった馮氏の韻律理論が、氏の仮定するそのままの形で上古漢語にも適用し得ることを前提として、かつそのことを積極的な根拠として“証明”が展開されている。極めて循環の輪の狭い循環論であり、まずこの点で問題であろう[13]。そして唯一の具体的な根拠は、【五】で挙げられる疑問代詞の関わる二例の合音形式という極めて零細な根拠だけなのである。いずれも「何」に関わるものだけに限られ、上古漢語において前置される単音節疑問代詞がすべてweak formであったことを主張する根拠としては、決して十分とは言えない。さらに言えば、挙げられたこの二例とて、必ずしも決定的な根拠になるとは限らない。今、李(1971)の体系による上古推定音価を付してみると、「何

---

12 Feng (1996：347)では、「What do you KNOW?」のように疑問詞が焦点でありながらストレスは別の位置におかれることがあり得ると主張している。しかし馮（2000）ではこの主張には触れられない。

13 本稿では馮氏の理論を批判する際、純粋に理論内部の問題（韻律理論・生成文法）には極力触れないことにする。しかしながら一点、どうしても拭いきれない疑問について言及しておきたい。それは疑問用法の疑問代詞を用いた文は、馮（2000）による焦点の類型では「問答焦点(Narrow Scope Focal Stress)」に分類されるはずである。「普通ストレス(Nuclear Stress)」が機能するのは、「文中の特定の成分が焦点とはならない」ことが条件のはずであるから、どうしての普通ストレス規則が周秦漢語の疑問詞疑問文では機能することになるのか、筆者には不明である。

なお、馮氏理論の理論的問題については、Feng(1996)の疑問代詞目的語の統語的位置に関する所説を批判した魏(1999)が、①一般の言語について言えば、疑問標識は文境界、少なくともそれに接近した位置に出現しなければならないが、Feng(1996)のモデルでは、疑問代詞目的語は最終的には、相当に階層の低い位置に置かれることになる、②Feng は疑問代詞目的語が焦点であることは認めるけれども、表層構造においては、大多数の疑問代詞が最終的に焦点位置を離れてしまう、といった問題点を指摘している。

gar**」+「不pjəg**」[14]>「盍***gap**」、「奈***nadh**」+「何*** gar**」>「那*** nar**」となる。これらにおいて疑問代詞「何」は、前者では合音の前字を担い、合音後では声母と主母音が保存されている。また後者では合音の後字を担い、合音後では主母音と韻尾とが保存されている。いずれの場合も音節の核たる主母音が保存されているのであり、「何」自体がweak formであったことを確実に保障するものとは必ずしもみなせない[15]。

4.1.2　weak form **仮説に不利な言語事実**

馮（2000）の理論によれば、周秦漢語では、単音節疑問代詞目的語が後置されて文末に位置することないはずである。ところが実際は、動詞「云」、准繫辞としての「爲」、介詞「於／于」の目的語を担う場合、また／如…何／構造[16]の間接目的語（「何」）を担う場合などには、動詞に後置され、しばしば文末に位置する。

(4-1) 長沮、桀溺耦而耕，孔子過之，使子路問津焉。長沮曰:「夫執輿者爲誰。」子路曰:「爲孔 丘。」（論語・微子）

(4-2) 子曰:「道之將行也與，命也。道之將廢也與，命也。公伯寮其如命何。」（論語・憲問）

(4-3) 既而大叔命西鄙、北鄙貳於己。公子呂曰:「國不堪貳，君將若之何。…」(左傳・隱公元年)

(4-4) 子夏之門人問交於子張。子張曰:「子夏云何。」對曰:「子夏曰:“可者與之，其不可者拒之。”」（論語・子張）

実は、これら単音節疑問代詞が目的語として後置される文の存在は、馮氏もみとめており（2000:246)、注の中で簡単に触れている。しかし、「先秦の後置される疑問目的語の出現は、厳格な言語環境の下に限られる。小数の固定的形式、例えば“謂…何”、個別の動詞“云”、個別の介詞“于”などである。…どうして単音節疑問代詞が先秦において少数の固定形式と個別の動詞或いは介詞のもとでは先に後置されたのか、さらなる研究が待たれる」として、これらに対する韻律文法からの解釈は与えられていない。

もう一点、言及しておきたいのは、単音節疑問代詞が単独で述語となった文についてである。そもそも文の中核たる述語を単独で担い得る成分が weak form であったなどという仮定は、筆者には受け入れがたい。さらにこのような文について、周秦における二音節 foot と普通ストレス規則の成立を前提に議論を進める馮（2000）の理論では、どのようなストレス付与が想定されることになるのか、明確な言及がない。

(4-5)「宗廟會同，非諸侯而何。赤也爲之小，孰能爲之大。」（論語・先進）

(4-6) 萬章問曰:「《詩》云‘娶妻如之何，必告父母。’信斯言也，宜莫如舜。舜之不告而娶，

---

14 「不」字は《廣韻》に複数の音が記載される：平聲尤韻，甫鳩切［“弗也。…又甫九·甫救二切”］；上聲有韻，方久切［“弗也。…又甫鳩·甫救二切”］；入聲物韻，分勿切［“與弗同。又府鳩·方又二切”］。平・上・去・入のうちいずれが上古漢語の否定副詞に由来する音であるかは簡単な問題ではない。ただし、いずれの音であっても本稿の論旨に影響しないので、仮に《廣韻》甫鳩切にもとづいて否定副詞「不」の上古音を***pjəg** と推定する。

15　後者の「那***nar**」に関しては、他の語からの合音の可能性もあろう（楊秀芳 2005 など参照)。本稿ではこの問題についての議論は行わない。

16 「如/若/奈…何」「謂…何」などの構造をまとめた表記の仕方とする。

何也。」(孟子・萬章上)

(4-7) 曰:「… 子濯孺子曰：‘今日我疾作，不可以執弓，吾死矣夫。’問其僕曰:‘追我者誰也。’…」 (孟子・離婁下)

そして以上のように、上古漢語において単音節疑問代詞が動詞に後置された例、あるいは単独で述語となった例は、“少数の例外”として処理することが可能なほど希少ではない。

【図表 4－1】《論語》《孟子》における単音節疑問代詞の位置

	非文末		文末・准文末	
	《論》	《孟》	《論》	《孟》
何	92	145	22(2)	48(34)
誰	10	9	2(0)	3(3)

＊文末例における（ ）は准文末の例（内数）。ここで言う准文末とは、その直後に助詞「哉」「也」「矣」などの文末助詞を伴って文終始する場合を指す。

＊「何」「誰」が補文末に位置するものは、除外する。(《論語》《孟子》の「何」、各 1 例)

＊“《詩》云”として《詩》からの直接引用部分とされるものは除外する（《孟子》「誰」の文末例 1 例 ）

【図表 4－1】から、例えば《孟子》においては、「何」が目的語或いは述語となり文末或いは准文末に位置する例が、全体の用例数の四分の一近くにものぼることが知られる。さらに、付言しておきたいのは、【図表 4－1】で示した文末の単音節疑問代詞は、《詩経》《楚辞》において他の字と押韻可能であり[17]、「之」「我」「女（汝)」などのように、前の字に押韻を譲るといった現象は、少なくとも両文献においてはみとめられない[18]。以上は単音節疑問代詞 weak form 仮説にとって不利な言語事実とみなしてよい。

4.2 馮(2000)理論と矛盾する例

馮氏理論が正しければ存在し得ない形式、或いはそれが存在することについて何らかの説明が必要な形式が、実際には少なからず存在する。

---

[17] 王力(1980)によれば、「何」の押韻例は《詩》で 23 例、《楚辞》においては 4 例ある。

[18] もう一点、興味深いのは、下例のごとく、単音節疑問代詞「何」が准文末に位置する場合、文末の助詞ではなく「何」の方が押韻を担っているかのような例も見出されることである。仮に押韻の認定が正しければ、「何」が weak form とはみなし難いことの傍証に加えてよい。ただし、下例の箇所は論者によって見解が異なり、王力(1980)は「何」と「為」の押韻とみとめるものの、例えば Baxter(1999)は押韻箇所とはみとめていない。

·出自北門，憂心殷殷。終窶且貧，莫知我艱。（文部）

已焉哉。　天實為之，謂之何哉。（歌部）

·王事適我，政事一埤益我。我入自外，室人交徧頗我。（錫部）

已焉哉。天實為之，謂之何哉。（歌部）

·王事敦我，政事一埤遺我。我入自外，室人交徧摧我。（文微通韻）

已焉哉。　天實為之，謂之何哉。（歌部）　　（詩·國風·邶·北門）

4.2.1「二音節疑問代詞目的語+単音節Ｖ」

馮（2000）の理論によれば、周秦においてSVO型の普通ストレス規則は成立したのであるから、「何N+V」といった「二音節疑問代詞目的語+単音節Ｖ」という形式は、“韻律衝突”を起こすが故に、周秦漢語以降決して存在し得ないはずである。しかし実際には、中古漢語におけるそのような例を探し出すことは、それほど困難なことではない。

(4-8) 顧和始爲楊州從事・月旦當朝，未入頃，停車州門外・周侯詣丞相，歷和車邊・和 覓蝨，夷然不動・周既過，反還，指顧心曰：「此中何所[19]有。」（世說新語・雅量)

(4-9) 爾時太子與十萬眷屬前後圍繞。始出城門，見於路傍人眾聚看。即便問曰：「此諸人輩爲何所看。」(過去現在因果經・大正 3-628c)

(4-10) 於是王師白太子言：「大王見使尋求太子，欲有所說。」太子答曰:「父王遣*汝(宋、元、明本作「汝來」)，欲何所道。」(過去現在因果經・大正 3-626c)

(4-11) 王怪在水甚久，便令使者按視，釋摩男在水中何等作。如王言往按視之，見釋摩男在水底死。(佛說義足經・大正 4-189a)

4.2.2 動詞性成分よりも長い疑問目的語

周秦漢語において「何N」型疑問目的語が前置されるとき、動詞性成分[20]よりも音節数が多いことがある。このようなとき、何故に“後重”型ストレスを要求するＳＶＯ型普通ストレス規則と韻律衝突が生じないのか、馮(2000)に明確な言及がない。或いは単に筆者の馮氏理論に対する理解不足によるのかもしれないが、このような疑問に対する何らかの説明があってしかるべきであろう。なお、(4-17)のごとく、二音節疑問目的語が「之」等を用いずに前置されたものは、馮(2000)の理論に対する明確な反例となる。

(4-12) 衛公孫朝問於子貢曰:「仲尼焉學。」子貢曰:「文武之道，未墜於地，在人。賢者識 其大者，不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學，而亦何常師之有。」（論語・子張）

(4-13) 孟子曰:「不仁者可與言哉。安其危而利其菑，樂其所以亡者。不仁而可與言，則何亡國敗家之有。…」 (孟子・離婁上)

(4-14) 鄖公曰：「 夫事君者，不爲外內行，不爲豐約舉，苟君之，尊卑一也。且夫自敵以 下則有讎，非是不讎。下虐上爲弒，上虐下爲討，而況君乎。君而討臣，何讎之爲。若 皆讎君，則何上下之有乎。…」（國語·楚語）

(4-15) 薳啓彊曰：「… 君將以親易怨，實無禮以速寇，而未有其備，使群臣往遺之禽，以 逞君心，何不可之有。」(左傳·昭公五年)

(4-16) 子大叔曰:「… 今執事有命曰:‘女何與政令之有。必使而君棄而封守，跋涉山川，蒙犯霜露，以逞君心。’ 小國將君是望，敢不唯命是聽。…」 (左傳·襄公二十八年)[21]

---

[19] 「何所Ｖ」は上古中期では「何[倒置された述語]＋所Ｖ」と分析できるものが少なくないが、中古においては(4-3)のごとく助動詞と動詞との間に位置するので、一語だとみなし得る。

[20] 動詞だけでなく、例えば「何 N 之 V」における「之 V」のごとく、前置目的語を指示する代詞を含めた「之 V」全体を指す語として用いる。

[21] この例における「何與政令」は述詞性の構造であり、「何N」という標記は正確ではないが、本稿の議論とは関わらないので、仮にここに含めておく。なお、この「何」は副詞として「與政令之有」全体を就職している可能性も排除できない。

(4-17) 孟子曰:「恥之於人大矣，爲機變之巧者，無所用恥焉。不恥不若人，何若人有。」(孟子・盡心上)

4.2.3「単音節疑問代詞目的語+之+V」

馮（2000）によれば単音節疑問代詞は接語化によって直接動詞に附着して二音節 foot を構成するはずである。確かに単音節疑問代詞目的語が「之」(「是」「云」などを含む）などを挟んで動詞と接続される例は稀少である。しかし下例のようなものを考慮すると、そのような例が皆無であるとは言い切れない。また下例のうち(4-18)－(4-20)は、動詞部分も単音節であり、馮氏（2000）の理論と明確に相反するものである。

(4-18) 瞻彼中林，侯薪侯蒸。民今方殆，視天夢夢。既克有定，靡人弗勝。有皇上帝，伊誰云憎。(詩・小雅・節南山之什・正月）

(4-19) 晏子曰:「燕，萬乘之國也。齊，千里之塗也。泯子午以萬乘之國爲不足說，以千里 之塗爲不足遠，則是千萬人之上也。且猶不能殫其言于我，況乎齊人之懷善而死者乎。吾所以不得睹者，豈不多矣。然吾失此，何之有也。」(晏子春秋・內篇雜上)

(4-20) 文執（摯）見齊威王，威王問道焉，曰:「 （寡）人聞子大夫之博於道也， （寡）人已宗廟之祠，不 （暇）其聽，欲聞道之要者，二、三言而止。」文執（摯）合（答）曰:「臣爲道三百編，而卧最爲首。」威王曰:「子澤（繹）之，卧時食何氏（是）有。」文執（摯）合（答）曰:「淳酒毒韭。」(馬王堆漢墓帛書《十問・文執（摯）見齊威王》)

(4-21) 趙文子冠，見欒武子，武子曰:「美哉。昔吾逮事莊主，華則榮矣，實之不知，請務實乎。」…見溫季子，季子曰:「誰之不如，可以求之。」〔韋昭註：言汝不如誰，可以求其次。不欲其高遠〕（國語・晉語）

4.2.4「疑問代詞目的語＋助動詞＋動詞」の解釈

上古中期（東周）において疑問代詞が助動詞を伴った動詞に前置される場合、一般的には助動詞の前に位置する[22]。ところが上古晩期（漢代）以降になると、多くが下例のごとく助動詞と動詞の間に位置するようになる。後者の類の文は、馮（2000）の理論からは生成され得ないと考える。

(4-22) 二世曰:「何哉。夫高，故宦人也。然不爲安肆志，不以危易心，絜行脩善，自使 至此，以忠得進，以信守位，朕實賢之，而君疑之，何也。且朕少失先人，無所識知，不習治民，而君又老，恐與天下絕矣。朕非屬趙君，當誰任哉。…」(史記・李斯列傳)

(4-23) 袁盎等入見太后，太后言欲立梁王。「梁王即終，欲誰立。」太后曰:「吾復立帝子。」(史記・梁孝王世家：褚少孫の補伝部分）

(4-24) 既出市，桓又遣人問欲何言。答曰:「昔晉文王殺嵇康，而嵇紹爲晉忠臣。從公乞一弟以養老母。」桓亦如言宥之。(世說新語・德行）

4.2.5 動詞の疑問代詞目的語が介詞フレーズの前に位置する場合

---

[22] 上古中期漢語における「疑問代詞目的語＋助動詞＋動詞」の例を挙げておく。

・管仲曰:「公誰欲與。」(莊子・徐無鬼）

・管仲敬諾，曰:「公誰欲相。」公曰:「鮑叔牙可乎。」(呂氏春秋・貴公）

魏(1999:268-269)が指摘するごとく、上古漢語において疑問代詞が動詞目的語となった場合、もし文中に介詞フレーズがあれば、疑問代詞目的語はその前に位置することが多い（例えば「奚以夫譊譊爲乎」（莊子・至樂）のごとく。動詞は「爲」）。ところが、馮(2000)の理論ではこのような文がどのように生成され得るのか、明確な説明がない。

4.2.6 疑問代詞が介詞目的語となった場合

上述のごとく、上古漢語において疑問代詞或いは「何N」型名詞フレーズが介詞目的語となった場合も前置されるが（例文(3-3)(3-5)）、その場合の前置メカニズムについて詳しい言及がない。

５．疑問代詞目的語の語順変化過程に対する説明力の問題

筆者は、馮勝利氏の理論の欠点は、何よりも、それだけでは言語事実を十全には説明できない点にあると考える。具体的には、氏の理論の上では同じ環境にあるはずの疑問代詞の語順が、実際には必ずしも同一の語順を取らないということである。

5.1 上古漢語における疑問目的語の後置例

上古漢語においては、本稿 4.1.2 で言及した以外の条件下で、疑問代詞目的語が後置されることは概して少ない。しかし、疑問目的語が「何N」型名詞性フレーズの場合、後置の語順をとることもそれほど珍しくはない。そしてこのとき、馮（2000）の理論によれば、当該の「何N」型名詞性フレーズと同じ韻律条件であるはずの疑問目的語が、同一の文献言語の体系の中で前置されているのである。

(5-1a) 何謂貴大患若身。吾所以有大患者，爲吾有身，及吾無身，吾有何患。故貴以身爲天下，若可寄天下。【何N：後置】（老子・十三章)

(5-1b) 何胃（謂）貴大梡（患）若身。吾所以有大梡（患）者，爲吾有身也，及吾無身，有何梡（患）。故貴爲身於爲天下，若可　（託）天下矣。【何N：後置】（帛書《老子》甲本）

(5-1c)　何胃（謂）貴大患若身。吾所以有大患者，爲吾有身也，及吾無身，有何患。故貴爲身於爲天下，若可橐（託）天下□。【何N：後置】（帛書《老子》乙本）

(5-2) 道者，萬物之奧。善人之寶，不善人之所寶。美言可以市，尊行可以加人。人之不善，何棄之有。【何N：前置】（老子·六十二章）

(5-3) 孟卬令秦得其所欲，秦亦令孟卬得其所欲，責以償矣，尙有何責。【何N：後置】(呂氏春秋・覽部・應言)

(5-4) 冉叔誓必死於田侯，而齊國皆懼。豫讓必死於襄子，而趙氏皆恐。成荊致死於韓 主，而周人皆畏。又況乎萬乘之國，而有所誠必乎，則何敵之有矣。【何N：前置】(呂氏春秋・紀部・論威）

5.2 中古漢語における状況

次に、中古漢語（後漢魏晋南北朝）における状況から氏の説を検討する。以下、三世紀

初期に洛陽で成立したと推定される《中本起經》と三世紀半に江南の建業で成立したと推定される《六度集經》、さらに五世紀半ばに南朝で成立したと推定される《過去現在因果經》における状況を示す[23]。

【図表 5－1】 **《中本起經》《六度集経》における疑問代詞目的語の語順**

	前置				後置			
	動詞目的語		介詞目的語		動詞目的語		介詞目的語	
	《中》	《六》	《中》	《六》	《中》	《六》	《中》	《六》
安	0	3{2:0:1}	0	0	0	0	0	0
焉	0	1{1:0:0}	0	0	0	0	0	0
奚	1	1	0	0	0	0	0	0
胡	0	2	0	1	0	0	0	0
如	1{1:0:0}	5{5:0:0}	0	0	0	0	0	0
若	1{1:0:0}	0	0	0	0	0	0	0
那	2{2:0:0}	0	0	0	0	0	0	0
所	3{1:0:2}	5{2:1:0}	0	2{0:1:0}	0	0	0	0
何所 a	1	1	0	0	0	0	0	0
何所 b	0	0	1{0:1:0}	0	0	0	1{0:1:0}	1{0:1:0}
何	26{3:0:0}	45{4:0:0}	8{0:1:0}	16{0:1:0}	0/(3)	0/(16)	3{0:3:0}	5{0:2:0}
何許	0	0	0	0	1{0:0:1}	0	0	0
何等	0	0	0	0	3	0	0	0
何物	0	0	1	0	4	0	0	1
誰	0	1	0	0	0/(1)	1/(2)	1	2

＊表中の数字は用例数を表す。

＊例えば《中本起經》の「何」の後置・動詞目的語欄に“0/(3)”とあるのは、通時的に有意味な後置例が 0 例と通時的に無意味な例が 3 例あるという意味。通時的に無意味な例とは、①「如(若・奈・謂)…何」構造の「何」、②動詞「云」の目的語、③介詞「于／於」の目的語、④准繫辞「爲」の目的語となった場合である。

＊例えば、《六度集經》の「安」の前置・動詞目的語欄に“3{2:0:1}”とあるのは、用例数が 3 例あり、そのうち疑問代詞目的語が、移動の〈目的地〉を表す 2 例、移動の〈起点〉を表すものが 0 例、動作の行われる或いは存在する〈地点〉を表すものが 1 例の意味。すなわち{目的地:起點:地点}の用例数。

＊本稿では、《六度集經》に含まれる小経のうち《佛說蜜蜂經》《小兒聞法即解經》《薩和檀王經》《鏡面王經》は資料としない。この議論に関しては松江(待刊 b)を参照のこと。

＊表に挙げた疑問代詞以外に、以下のようにいわばゼロ形式の疑問代詞が目的語を担っているとみなし得

[23] この三文献の成立時期・地域についての検討は松江(待刊 b)で行ったため、本稿では省略する。

るものがあるが、本稿では扱わない（ゼロ形式と動目関係を結ぶ動詞・介詞に下線を付す）。

· 獵士素知太子迸逐所由，勃然罵曰：「吾斬爾首，問太子為乎。」（六度集經·大正 3-9b)

· 兒曰：「昔為王孫，今為奴婢。奴婢之賤，緣坐王膝乎。」［零代詞=介詞(「緣」)賓語］（六度集經·大正 3-10c)

＊「何所 b」は〈目的地〉〈起点〉〈地点〉といった場所を指すもの。「何所 a」はそれ以外の、一般の事物を指すもの。両者は歴史的来源を異にする可能性があり、かつ統語的分布も異なることがあるため、暫定的に別語として扱っておく。

＊通時的に有意味な用例数は色をつけて強調する。

(5-5) 菩薩伯叔，自相謂曰:「吾之本土，三尊化行，人懷十善，君仁臣忠，父義子孝，夫信婦貞，比門有賢。吾等將復誰化乎。…」【誰：前置（動詞目的語）】(六度集經・大正 3-37a)

(5-6) 婦還睹太子獨坐，慘然怖曰:「吾兒如之，而今獨坐。…今兒不來，又不睹處。卿以惠誰。可早相語。…」【誰：後置（動詞目的語）】(六度集經・大正 3-10b)

(5-7) 佛授憂陀，使作沙門，授其法戒。憂陀自念：「今爲弟子，無緣復還。王須消息，因誰報命。」【誰：後置（介詞目的語）】(中本起經・大正 4-154b)

(5-8) 常悲菩薩仰視報曰:「當由誰聞斯尊法乎。以何方便，之何國土，厥師族名。」【誰：後置（介詞目的語）】(六度集經・大正 3-43b)

(5-9) 兩道士進稽首曰:「斯音絕世，將爲誰樂。」【誰：後置（介詞目的語）】(六度集經・大正 3-44c)

(5-10) 佛告眾人:「且自觀身，觀他何爲。色欲無常，合會有離。如泡如沫，愚者戀著，殃禍由生。身爲苦器，眾生皆然。」【何：前置（動詞目的語）】(中本起經・大正 4-149c)

(5-11) 相國百揆，靡不悵然，僉曰:「斯象猛力之雄，國恃以寧。敵仇交戰，輒爲震奔，而今惠讎國，將何恃。」【何：前置（動詞目的語）】(六度集經・大正 3-8a)

(5-12) 樹神人現顏華非凡，謂阿群曰:「爾爲無道，以喪王榮。今復爲元酷，將欲何望乎。」【何：前置（動詞目的語）】(六度集經・大正 3-22c)

(5-13) 梵志暮還，奉齋不餐。婦怪而問:「不審何恨。」答曰:「不恚。吾齋故耳。」婦重質之。「何從齋來。」【何：前置（介詞目的語）】(中本起經・大正 4-156c)

(5-14) 家羊日就而乳，牧人尋察睹兒，即歎曰:「上帝何緣落其子於茲乎。」【何：前置（介詞目的語）】(六度集經・大正 3-25c)

(5-15) 迦葉反顧，忽不見佛。佛已到北方鬱單曰，取自然粳米。迦葉未至，已坐其床。迦葉問佛：「復從何來。」【何：後置（介詞目的語）】 (中本起經・大正 4-150c)

(5-16) 抗聲哀曰:「象以其牙，犀以其角，翠以其毛。吾無牙角光目之毛，將以何死乎。」【何：後置（介詞目的語）】(六度集經・大正 3-24c)

(5-17) 一龍重曰:「化爲小蛇耳。若路無人，尋大道戲，逢人則隱，何所憂乎。」【何所 a：前置（動詞目的語）】（六度集經・大正 3-27c）

(5-18) 二人俱前，相逢中路，便問頗陛「章服反常，何所從出。豈有師宗可得聞乎。」【何所 b：前置（介詞目的語）】(中本起經・大正 4-153c)

(5-19) 國王波斯匿以日昳時道過佛所。下車卻蓋，拱袖直前，稽首于地，卻就王位。佛問王言:「從何所來，衣弊形瘦乎。」【何所 b：後置（介詞目的語）】(中本起經・大正 4-160b)
(5-20) 王問憂陀：「悉達在家，吾爲作床，精寶四種。於今所坐，何物用作。」【何物：前置（介詞目的語）】（中本起經・大正 4-154c）

【図表 5－2】《過去現在因果經》における疑問代詞目的語の語順

	前置		後置	
	動詞目的語	介詞目的語	動詞目的語	介詞目的語
何	6	6{0:1:0}	0/(1)	12{0:12:0}
何所 a	3	0	0	0
何所 b	2{2:0:0}	0	0	1{0:1:0}
何許	0	0	3{0:0:3}	0
何處	0	0	1{1:0:0}	0/(2)
何等	0	0	7	0
誰	0	0	1	0

＊表の見方は【図表 5-1】に准ずるものとする。
＊上表では「云何」の「何」は除外した。本稿では「云何」について、上古では動目フレーズだとみなすが、中古では複合語化しているとみなす。この「云何」は《過去現在因果經》に 62 例みられる。

(5-21) 得此夢已，即大驚悟，心自念言:「我今此夢，非爲小緣。當以問誰。宜入城內，問諸智者。」【誰：後置（動詞目的語）】(過去現在因果經·大正 3-621c)
(5-22) 時優陀夷即答王言：「…太子獨自在於樹下，遙見一人。剃除鬚髮，著染色衣，來太子前而共言語。言語既畢，騰虛而去，竟亦不知何所論說。…」【何所 a：前置（動詞目的語）】(過去現在因果經·大正 3-632a)
(5-23) 爾時車匿聞此言已，…思惟良久，流淚而言：「大王慈敕如是之嚴，且又今者非遊觀時，又非降伏怨敵之日。云何於此後夜之中，而忽索馬。欲何所之。」【何所 b：前置（動詞目的語）】 (過去現在因果經·大正 3-632a)
(5-24) 善慧仙人聞斯語已，舉體毛豎，心大歡喜，踊躍無量。便與外道分別而去。外道問言:「師何所趣。」【何所 b：前置（動詞目的語）】(過去現在因果經·大正 3-621c)

上図から、第一に、氏の理論によれば同様の韻律条件を有するはずの各単音節疑問代詞のうち、「誰」は後置が優勢であるのに対して、「安」「奚」「胡」「焉」「所」「如」「若」「那」などは基本的に前置を保つこと、また「何」は動詞目的語の場合は原則として前置されるが、介詞目的語の場合は後置が少なくないこと（五世紀の《過去現在因果經》では後置が優勢）が知られる。そして第二には、二音節疑問代詞については、馮氏の指摘するようにそのほとんどのものが後置が優勢であるが、場所以外の一般の事物を指示する「何所 a」は

一貫して前置を保つこと、また「何所 a」以外のものでも前置される場合があることが知られる。以上のことは、疑問代詞目的語の語順変化には、音節数という韻律上の条件だけが関わっているのではなく、何らかの語彙的・文法的条件が関与していることを強く示唆するものである。そもそも馮(2000)の理論では、単音節疑問代詞目的語が後置されるメカニズムについての明確な説明を欠いているのであるが（本稿注 10 参照）、weak form であるはずの単音節疑問代詞「誰」が、strong form であるはずの「何所 a」よりも先駆けて後置に転じている現象に注目するだけでも、馮氏理論が成立することの困難さが、十分に看取されよう。“後重”という SVO 型ストレス構造の要求に対して strong form たる二音節疑問代詞目的語が後置された形式が最も適合したものだという仮説が、馮(2000)の理論の核心だからである。なお、これら《中本起經》《六度集經》《過去現在因果經》にみられるような状況は、他の中古漢語資料においても広く見られるため、決して偶然ではあり得ない[24]。

6 結論

以上、本稿 4.において馮氏理論そのものについて問題が少なくないこと、本稿 5.において馮(2000)の理論では上中古間における疑問代詞目的語の語順変化の過程を十全には説明し難いことを指摘した。ここから、筆者は、馮勝利氏の提出した疑問代詞目的語語順変化メカニズムについての理論は、決して完全なものではなく、少なくとも修正を経ない形では受け入れ難いと結論したい。

それではこの疑問代詞目的語の語順変化はどのような要因によって、如何なる過程を経て進行したのであろうか。実はこの問題について、筆者は松江(2003)(2005)において仮説を提出したことがある。すなわち、疑問代詞目的語の前置規則は、規則自体は中古（後漢魏晋南北朝）を通じて消滅してはいなかった。語順変化は、①上古以来原則として前置を保ち続けた単音節疑問代詞のうち、「何」以外のものが出現頻度の面で著しく衰退し、②一方では「何 N」型名詞性フレーズに由来するために前置規則に従わない「何 N」型疑問代詞が大量に出現した、③そして「誰」「何等」など一部の疑問代詞目的語が語順変化を起こした、という過程を経て進行したと考えた。ここで③の変化を生じた主要な要因は “統語的曖昧性を軽減しようとする欲求”であり、②において「何 N」型疑問代詞が後置の語順とったのは、“名詞性フレーズへの類推”によるものである。そしてこの両者の要因が増大したのは、上古疑問代詞体系崩壊に由来すると主張した（詳しくは松江(2003)(2005)を参照）。このような拙稿の提出した仮説は、そもそも上古末期において何故に「何 N」型名詞性フレーズが動詞に後置されるようになったのかについて、さらなる説明が必要であるという課題は残されている。しかし、言語事実を丹念に集積し、それを分析していくという帰納的方法によっても上中古間に生じた疑問代詞目的語語順変化のメカニズムを解明する糸口は得られるという見通しは、示し得たのではないだろうか。

[24] 松江（2005）では、四世紀に成立した《太子須大拏經》、五世紀に成立した《雜宝藏經》を資料に調査を行った。本稿における調査結果とほぼ同様の傾向がみられる。

7　余論

さて、それでは上古漢語における疑問代詞目的語の前置現象、あるいは上中古間における疑問代詞目的語の語順変化に、韻律構造あるいは韻律構造の変化が全く関与していなかったのであろうか。この重大な問題に対して、筆者は現時点で正面から答えることはできない。

本稿で言及した種々の現象のうち、おそらく韻律が関与したことが最も疑われるのは、馮氏の言う周秦漢語の「V前における相補分布」、すなわち目的語となった場合、単音節「何」は直接動詞に前接され、「何 N」は必ず「之」等を挟んで動詞に前置される現象（ただし上述のように例外が存在するために、正確には“強い傾向”という性質に止まるものである）であろう。しかしながら筆者は、仮に韻律の関与があったとしても、少なからず例外が存在する以上、韻律構造がすべてを支配するといった関与の仕方ではあり得ず、統語論・語用論レベルの条件と複雑に絡み合っていたと推定する。

さらに付言すれば、筆者は、この「V 前における相補分布」についても、以下ごとく純粋に文法レベルの現象として解釈することも充分に可能だと考えている。

まず、上古中期漢語（東周）における「何 N」型疑問代詞は、原則的には疑問代詞として完全に語彙化したものではなく、統語的にはNを head とする名詞性フレーズとみなすべきだと考える。そして、上古中期漢語においては、一般の（疑問代詞を構成要素に有しない）名詞性フレーズが目的語となり、何らかの語用論的・談話的条件を満たして動詞に前置される現象がみとめられることに注意したい。このとき、原則として当該の名詞フレーズと動詞との間に「是」「之」が生起するのである。

(7-1) 及漢，楚康王卒。公欲反，叔仲昭伯曰:「我楚國之爲，豈爲一人行也。」(左傳・襄公 28 年)

(7-2) 孟武伯問孝，子曰:「父母，唯其疾之憂。」（論語・爲政）

そうすると、「何 N」型名詞フレーズが目的語となった場合も基本的には同様の現象が生じているのだと考えられないだろうか。すなわち「何 N」型名詞性フレーズが目的語となり、動詞に前置されるときに「之」が生起するのは、当該の「何 N」という形式が統語的には名詞性フレーズであるためだと解釈するのである。ただし、一般の名詞性目的語と異なるのは、文中において原則として焦点を担う疑問代詞（疑問用法の場合）が存在するために、特殊な文脈がなくとも動詞に前置されるのだということになる。この見解に立てば、本稿 4.2.2 において前述した「何 N」型名詞フレーズ目的語の方が動詞よりも音節数が多い場合にも「之」が生起する現象を、より合理的に解釈できると考える。なお、単音節疑問代詞目的語が「之」等によって隔てられることなく動詞に前置され得るのは、それが“閉じた類”である機能語であるためと考える。上古の単音節疑問代詞は、その統語機能が名詞と大きく異なることを、確認しておきたい。以上の名詞性フレーズが目的語となった場合に

のみ、「之」が生起するという現象は、あくまでも原則であって、談話的・語用論的条件によっては名詞性フレーズが「之」が生起せずに前置されたり、単音節疑問代詞目的語でも「之」「是」が生起するといった“例外”が生ずることをみとめるべきである。

最後に、馮氏理論において重要な位置を占める「疑問代詞目的語後置以前における〔何 V〕と〔何 N 之 V〕の相補分布」に関して、一点だけ補足しておきたい。それは、上古漢語においては、単音節疑問代詞目的語に比して、「何 N」型名詞性フレーズが動詞目的語となった例は、実際には相当に少なく、「〔何 V〕と〔何 N 之 V〕の相補分布」とは言うものの、両者は頻度の面で相当に大きな差異があるということである。この点で、中古以降の「何 N」型名詞性フレーズ目的語および「何N」型疑問代詞目的語とは、体系内に占める位置が相当に異なる。今、かり上古中期の《論語》《孟子》と中古の《中本起經》《六度集經》《過去現在因果經》を例に示す。

【図表 7－1】上・中古における「何N」型疑問目的語の出現頻度

	前置			後置		
	/何/+V/P	何 N+之+V/P	何 N+V/P	V/P+/何/	V/P+何 N	V/P+何 N
《論》	73/13	2/0	0/0	0/0	0/0	0/0
《孟》	58/49	4/0	0/0	0/0	0/0	0/0
《中》	34/8	0/0	1/2	0/4	10/1	8/1
《六》	63/19	7/0	1/0	1/7	15/6	0/2
《過》	6/6	0/0	2/0	1/13	6/7	11/1

＊/何/は、「何」以外当該の文献に生起する単音節疑問代詞のすべてを含む。

＊“何 N”は「何」が統語レベルでNを修飾する構造（名詞性疑問フレーズ）、“何 N”は「何」とNの結合が語構成レベルのもの（二音節疑問代詞）。

＊表中の数字について“/”の左側は動詞目的語となった用例数、右側は介詞目的語となった用例数。

＊表中の目的語は、〈目的地〉・〈起点〉・〈地点〉を表すものを含む。

このように上古漢語においては、「何 N」型名詞性レーズが動詞目的語となった例が思いのほか少ない。これには幾つか要因が考えられる。第一には、上古中期において「何 N」型名詞性フレーズが動詞目的語となることが期待される場面においても、実際には「何 N」が単独で述語を担うことが多いということである。

(7-3) 及行，飲以酒，壽子載其旌以先，盜殺之。急子至，曰:「我之求也，此何罪。請殺 我乎。」又殺之。(左傳・桓公十六年)

(7-4) 夏，師及齊師圍郕。郕降于齊師，仲慶父請伐齊師。公曰：「不可。我實不德，齊師何罪。罪我之由。…」(左傳・莊公八年)

(7-5) 及入，勃鞮求見，公辭焉，曰：「驪姬之讒，爾射余於屏內，困余於蒲城，斬余 衣袪。

又爲惠公從余於渭濱，命曰三日，若宿而至。若干二命，以求殺余。余於伯楚屢困，何舊怨也（韋昭註：…數見困，有何舊怨）。 …」（國語・晉語）

(7-6) 萬章曰：「敢問交際何心也(趙岐註：問交接，道當執何心爲可者)。」孟子曰:「恭也。」（孟子・萬章下）

上例(7-3)～(7-5)は、中古以降であればいずれも動詞「有」が用いられることが期待され、(7-6)も何らかの動詞が生起することが疑われるところである[25]。

「何 N」型名詞性フレーズが動詞目的語となった例が少ないもう一つの要因は、上古漢語の動詞が現代漢語のそれに比して相対的に総合性が高く、しばしばその目的語に関する意味特徴が、動詞自体に備わっていることだと考える。次の対話をみられたい。

(7-7)「許子冠乎。」 曰 :「冠。」 曰:「奚冠。」曰:「冠素。」（孟子・滕文公上）

この文は孟子と陳相の対話で、孟子が陳相に対して、許行（許子）のことを尋ねたところである。孟子は陳相にまず許行が冠をかぶるのか否かを問い、かぶることを確かめたのちに、それは“どんな”冠であるのかを問うている。にもかかわらず、「何 N」形式を用いずに単音節疑問代詞「奚」だけでこの意味を表現している。それが可能なのは、上古中期漢語の動詞「冠」が〈(冠を）をつける〉意味であって、その目的語は一般にかぶりものに限定されることと関係するのであろう。このような動詞の総合性の高さも、「何 N」型名詞性フレーズ目的語の生起が少ないことと関係していると推定する。

〔テキスト〕

・《毛詩正義》十三経注疏整理本，北京大学出版社，2000 年
・《論語注疏》十三経注疏整理本，北京大学出版社，2000 年
・《孟子注疏》十三経注疏整理本，北京大学出版社，2000 年
・《春秋左傳注（修訂本）》楊伯峻，中国古典名著譯注叢書，中華書局，1990 年
・《國語集解》徐元誥，中華書局，2002 年
・《老子校釋》朱謙之，(新編諸子集成第一輯)中華書局，1984 年
・《呂氏春秋注疏》（第一冊～第四冊）王利器，巴蜀書社，2002 年
・《晏子春秋集釋》吳則虞，中華書局，1962 年
・《馬王堆漢墓帛書(肆)》文物出版社，1985 年
・《郭店竹簡老子釋析與研究(增修版)》萬卷樓圖書有限公司，1999 年
・《史記》中華書局，1997 年
・《論衡校釋》(新編諸子集成第一輯)，中華書局，1990 年
・《世說新語箋疏》余嘉錫，中華書局，1983 年
・《廣韻》台灣中華書局，1987 年
・《大正新脩大蔵經》高楠順次郎他，大蔵出版社，1924-1934 年
・中央研究院漢籍電子文獻・上古漢語語料庫摘要，中央研究院計算中心

[25] このような例を動詞が省略されているとみなし得るかについては、態度を保留しておきたい。

〔主要參考文獻〕

（日文）

・太田辰夫 1964『古典中国語文法』，改定版，汲古書院，2002 年

・太田辰夫 1988『中国語史通考』，白帝社

・木村英樹 2002「アメリカにおける中国語文法研究の動向」『中国語学 249』

・松江崇 2003「古漢語における禅母系疑問代詞の語順変化」『北海道大学文学研究科紀要』111

・松江崇 2006「古漢語における匣母系疑問代詞目的語の語順変化」『東ユーラシア言語研究』第１集，好文出版

（中文）

・陳文芷 1981「談重音」『中國語學』228

・馮利(馮勝利)1994〈論上古漢語的重音轉移與賓語後置〉《語言研究》1994 年第 1 期(總 26 期)

・馮勝利 1997《漢語的韻律、詞法與句法》北京大學出版社

・馮勝利 1998〈論漢語的自然音步〉《中國語文》1998 年第 1 期

・馮勝利 2000《漢語韻律句法學》當代語言學叢書，上海教育出版社

・馮勝利 2005《漢語韻律語法研究》北京大學出版社

・李方桂 1971〈上古音研究〉《清華学報》新九卷第 1.2 期合刊,pp.1-61；《上古音研究》商務印書館，1980 年

・松江崇 (待刊 a) 〈上古中期禪母系疑問代詞系統中句法分佈的互補現象〉《漢語史學報》第六輯

・松江崇（待刊 b）〈略談《六度集經》語言的口語性—以疑問代詞系統爲例－〉

・魏培泉 1999〈論先秦漢語運符的位置〉，Linguistic Essays in Honor of Mei Tsu-Lin : Studies on Chinese Historical Syntax and Morphology, ed. by Alain Peyraube and Chaofen Sun.Paris: Ecole des Hautes Etudesen Sciences Sociales

・王力 1980 *《詩經韻讀》上海古籍出版社／《詩經韻讀·楚辭韻讀》王力別集，中國人民大學出版社，2004 年

・吳爲善 2003〈漢語“韻律詞”的界定〉《語言學論叢》第二十八輯

・徐傑・李英哲 1993〈焦點和兩個非線性語法範疇：“否定”“疑問〉《中國語文》1993 年第 2 期

・楊秀芳 2005〈論閩南語「若」的用法及其來源〉《漢學研究》第 23 卷第 2 期

・葉群 2001《漢語語句韻律語法功能》華東師範大學出版社

・殷國光 1985〈先秦漢語帶語法標識的賓語前置句初探〉《語言研究》第 2 期

（英文）

・Baxter, William H.Ⅲ.1992: A Handbook of Old Chinese Phonology. Trends in Linguistics Studies and Monographs 64. Berlin: Mouton de Gruyter

・Feng,sheng li. 1996. Prosodically constrained syntactic changes in Early Archaic Chinese, *Journal of Chinese Linguistics*. Vol. 5, No. 4.

・Liberman, M. & Prince, A. A. 1977. On Stress and Linguistic Rhythm. *Linguistic Inquiry*. 8:199-286

・Zec,Draga and Sharon Inkelas. 1990. Prosodically Constrained Syntax, in S. Inkelas and D.Zec(eds.) *The Phonology-Syntax Connection* , University of Chicago Press, Chicago, pp.365-378